

## 「幻を書きしるせ」

ハバクク書 第2章 1節～4節  
ローマ人への手紙 第1章 16節～17節

説教 本庄 侑子 牧師

ハバクク書は、ヨシヤ王が志半ばで戦死したことへの嘆きから始まります。ヨシヤ王は良い王さまでした。人々は期待していました。色々あったけれど、今はヨシヤがいる。これから輝かしい時代がやってくる。そう夢を見ていました。しかし、そのヨシヤが突然、戦死してしまっただけです。誰も予期できなかった仕方で、国は崩壊に向かって行くこととなりました。

ハバククは嘆きました。なぜ良い王が戦死して、敵が生き残っているのか。神よ、なぜですか。なぜ沈黙しておられるのか。今、遠藤周作の小説『沈黙』が映画化され、話題を集めています。映画を見て色んな感想を抱きますが、大切なことは、かつてユダヤの地で同じ問いが発せられた時、聖書の神が何をなさったか、聖書に聞くことだと思えます。

神はハバククにある答えをお与えになりました。それは、ハバククが考えていたような答えではありませんでした。これから私は、カルデア人という敵を起こして、あなたたちを打ちのめす、というものでした。ハバククは理解できません。ますます神へと向かい、胸ぐらを掴むようにして、神の考えを知ろうとします。私たちは平穏な時には自分で全てを把握して、自分の力で生きていくように思いがちです。しかし、人生の荒波が押し寄せると、この世のものではどうやっても解決できない問題に突き当たります。ハバククも、これまでの生き方の限界地点に追い詰められました。

ハバククは見張所に立ち、物見やぐらに身を置きます。神が言われた通り、カルデア人が攻撃してくる様子が最もよく見える場所に向かいました。それは、同胞が、なす術なく逃げ惑い、殺されていく姿が最もよく見渡せる場所でもありました。ハバククはそこに立ち、目を見開いて、神が何をなさるかを見たのです。

神は、ある幻を示されました。それは、バビロニア帝国が滅びるという幻でした。バビロニア帝国は繁栄を極めていました。滅びるなど考えられません。しかし、神は言われたのです。たとえ遅くなっても待っておれ、必ずその時が来る、と。ハバククの目には、神の計画は全く進んでいないように見えます。むしろ逆行しているようにしか見えません。下を見下ろせば敵

はやってきています。国は滅びのです。しかし、神は言われました。幻の実現は、定められた時を待ち、終わりに向かって急いでいる！だからはっきりと書き記せ！

以降、ハバククは嘆くことをやめました。そして賛美しました。目の前の現実が悪化の一途を辿りました。神による奇跡的な介入はありませんでした。良い王が死んで、敵が生き残る。この不条理が解決されたわけでもありませんでした。ハバクク自身も滅びの中で死んでいくこととなりました。しかし、ハバククの人生の結論は賛美でした(ハバクク書の最後を参照)。必ず来るという幻を見せられた途端、ハバククの足場は地上の見張所から高い所(新共同訳聖書では「聖なる高台」)へと移されました。たとえ羊や牛を奪われても、聖なる高台にいる限り、喜びや生きる力は失われなくなりました。

神は言われました。「見よ、その魂の正しくない者は衰える。しかし義人はその信仰によって生きる。」(4節)「義人」は「正しい人」と言い換えられます。神は正しさを求められました。神が求められる正しさとは何でしょうか。ヨシヤ王のように良い人であることでしょうか。違うでしょう。それは信仰によって生きること。神と神の真実に信頼して生きることです。

神はハバククに言われたのです。まだ終わりではない。私に任せておけ。私の時と方法に信頼して生き、そして死んだらいい。幻はなお、まっしぐらに進んでいる。だから待て。自分で結論を出して希望を捨てるな。それが、ハバククが聞いた神の答えでした。

ハバククが立たされた聖なる高台に私たちも今、連れてこられています。礼拝は、死からよみがえらせ、天に昇られた復活の主イエス・キリストがおられる聖なる高台です。罪と悪、わたしたちを萎えさせる出来事、老い、病い、死に打ち勝ちよみがえってくださったキリストがおられ、語りかけてくださる場所です。終わりの日の幻を見せられ、最終的なキリストの勝利を待ち望む者とされ、力の限り喜び歌って生き、死んでいくようになる場所です。

主は今日も言われます。幻を書きしるせ。私を信ぜよ。私があなたの神なのだから。

(記 本庄侑子)